

事実の権威

いずれが勝ちか

見るかげもない荒家に六十をも過ぎた老婆が住んでいる。その顔の輝き、その眼は常に微笑んでいる、彼女の口からは常に念仏称名の声が聞える。彼女は人に生れたことを感謝し、不幸であった人生の後半生すら、感謝法悦の中に融している。

その隣に広大な邸宅を構えた金持ちがある、家庭の内には不平が絶えない、奥様のお口からさえ、呪いのお言葉を聞くことがある。世には、食うに余り、費すには十分すぎてもなお不平を言う人がある。主人が村の議員になつた位が心の毒で、一切人を目下に見て、聞法修養も心掛けたことなく、自称物知りで、あたり五十年を天狗のままで終る。

彼の信条

彼の前には一点の光が見える。

彼の前には過去の聖者偉人の足跡が見える。彼はそれを見つめる。

世人は彼を無智だと笑つた。けれども彼は雄々しくも出発した。

彼の周囲の人々は狂者だと言つた。それでも、それが耳に入らぬ者の如く走つた。

彼には時にその日に食うものさえない日があつた。けれどむ彼は立ち止まらなかつた。

ある時は多数の民衆が彼の後を追うて来た。そうして彼を弄んだ。しかし間もないう内にそれらの民衆は手に手に石礫をつかんで彼の全身めがけて投げつけた。しかし彼は見向きもしなかつた。彼は彼の光を追つて走つたのだ。

ある時は彼の財布の中の金をとつて逃げたものがあつた。しかし彼はそれを追うよりは道を走ることが忙しかつた。

彼は三年間も夏服を着て冬を通したことがあつた。彼は彼の心中から根強い悪魔が彼を誘惑しかけたけれども、そんな時には不思議なる力が彼をよびました。彼は依然として彼の道を急いだ。

彼を追つて走つた若者たちの中には、彼よりも更に勝れたる権威者が生れている。

彼はそれを見ることを無上の喜びとしている。

彼の信条は、「念願は人格を決定す」「経緯は力なり」ということである。彼は常に内にある力強い声を聞こうとしている。

真の力

人は馬鹿だと言われたから馬鹿になるのではない。賢いと言われたから賢くなるのではない。

民衆が馬鹿だとか、賢いとか言っている間に、自分自身の道を精進した者だけが賢くなる。

無責任な民衆たちは、他人を見て馬鹿だとか賢いとか言っている間に、ほんとの馬鹿でおわるのが多い。

人は馬鹿だと言われたり、賢いと褒められたりするために生れて来たのではない。無責任な人の口はどうでもいい。事実だけが権威である。

民衆が馬鹿だというのには気をかけなくてもいい。それよりも自己が馬鹿であることに気附かねばならぬ。

人格

九州の東陽円成和上が大往生をとげられたのは本年の二月十八日であった。師の死後、誰かの弔詞に、「関西の明星」という讃辞があった。真にその信仰、その学徳、共に一世を風靡して関西の明星であった。師のお育てを蒙ったことのある人たちは、真の親のように慕っている。人格の人であり、真愛の人であった。あるところには、和上と同じ司教の学位を持った僧侶の方がある。その方が高座に上れば話の半分は人の悪口でおわる。自慢でおわる。その話を聞いた人たちの大部分が様付けに名をよぶ者は少い。学位でもいかぬ。弁舌でもいかぬ。人格の光こそ権威である。

権威者を求む

いずれの社会にも、如何なる場所にも、堂々わが道を歩む権威者がほしい。なまけた青年団の中から一人の求道者が出る。

目覚めない輩たちが口々に罵る。

八裂きにされても、求道の旅を続ける権威者がほしい。

同級生が集つて悪い相談がまとまりかける。

頑として不正に組せぬ権威者がほしい。

自信をもつて歩む者には言いわけがいらぬ。

正しいと信じたことの前には他人をはばかり躊躇がいらぬ。

言葉でものを言わせず。事実でものを言わせる権威者がほしい。

付けたものははげる。借りたものは返さねばならぬ。

付けたものも、借りたものも、権威ではない。

我が内に獲得したもののみが、光であり、権威である。

獲得せんと思ふ者は求めよ。

精進する者のみやがて権威者となる。